

巻 頭 言

谷 川 彰 英*

筑波大学の教育研究科社会科教育コースの院生を中心にした筑波大学社会科教育学会を創設するという案内をいただいて、初めてつくばに出かけたのは1982年2月11日のことであった。荒川沖で降りてバスでつくばに向かったものの、その遠いことと、バス停から降りて見渡した光景がどこも同じように見えたことをつい昨日のように思い起こす。

朝倉隆太郎先生の後任として筑波大学に赴任したのは1986年のことだが、それ以降20年にわたって教育研究科社会科教育コースの皆さんとおつきあいしてきたことになる。数年前、筑波大学の大学院改組に伴って教育研究科の存在そのものが危うくなった時期があったが、努力の結果、その危機は回避することができた。2007年度から研究科そのものの名称は変わる可能性があるが、社会科教育コースは存続させ、さらに発展させるべく検討を進めている。

20数年間、筑波大学社会科教育学会は「筑社学」という名称で親しまれてきたが、この度名称を「中等社会科教育学会」として再スタートすることになった。社会科教育コースの修了生の数が増えるに従って、学会の機能と同窓会の機能が判別できず、両者とも停滞を余儀なくされてきた。そこで、両者のさらなる発展を期して学会としては「中等社会科教育学会」、同窓会としては「筑社会」を同時発足させることにした。両者は同じ組織の両輪のような位置づけにある。

中等社会科教育学会は基本的には従来の筑波大学社会科教育学会の組織を踏襲していくが、全国に門戸を開いた学会としてさらに充実させていくことになる。学会の名称としてはほぼ1年間さまざまに検討を加えてきたが、最終的に「中等社会科教育学会」とした。我が国でこの名称を掲げられるのは筑波大学のみであると考えたからである。東京高等師範学校から東京教育大学、そして筑波大学へと続く教員養成の歴史はまさに中等教育の教員を対象にしたものであった。教育研究科はまさにその歴史と伝統を今に継承する組織なのである。

もともと、20世紀の初頭、アメリカで生まれた社会科は中等教育レベルの教育改革の一環として誕生した。当時の工業化・都市化された社会に多様な移民が流入してきた社会の中でどのような *good citizenship* を育成するかが問われて社会科は生まれた。だからより成人に近い中等教育が問題にされたのである。

それに比して、我が国の場合は社会の成熟によるというよりも、戦後の教育改革の中で導入されたという歴史的経緯があるために、むしろ逆に中等教育というよりも初等教育に重点が置かれてきた。我が国に社会科が設置されてすでに60年近い年月が経過しているが、今もって社会科が日本の社会に十分根付いているといえないのは、このような背景に基づいている。

本学会は中等社会科の関係者による学会であるが、この「社会科」には高等学校の「地理歴史科」「公民科」も含まれる。もちろん初等社会科も排除するものではない。小学校から中学校、高等学校、大学、大学院にいたるまでどのような社会市民的資質を形成するかを研究し、発表する場だと考えていただきたい。現代の教育改革の中で、中高一貫教育は当た

* 中等社会科教育学会会長

り前になってきたが、さらに小中一貫教育も注目を集めている。そのような事態を考えれば社会科についても幅広い視野で研究していく必要性は変わっていない。

学会として最も重要な活動は、学会誌の編集である。この度の改組に伴って学会誌も『中等社会科教育研究』と改称した。学会誌の内容も大幅に変更し、高レベルの論文を掲載するとともに、学校現場で実践している教師たちにも親しみを持てる内容にすることにした。是非、投稿など積極的に参画していただきたい。

関係諸氏の協力をいただき、本学会を国内はもとより世界にも発信できるパワフルな組織として発展させていっていただきたい。

2005年10月10日